

ふうりんや

みずきあかね

ふうりんや

とにかくあつい。暑いのは熱いの方を使うのがいいんじゃないかと思うくらいの猛暑日に、私は駅前のビル群の中を歩いていた。ウインドーショッピングにも飽きたし、そろそろどこかで涼みたい。できれば静かなところで。

きゃあきゃあと女の子達が『最後尾はこちらです』というプラカードを持った店員の後ろに並んでいく。先日オープンしたばかりの砂糖菓子のように真っ白なビルは、緑の街路樹と青空によく映える。魅力的に見えるけど、入ろうとは思えなかった。このあたりで暴漢に襲われたりして、なんて物騒な妄想をしてみる。バカなことを考えて、と、自分でも思う。べつに日常に不満があるというわけではない。仕事も順調で健康で恋人もいて充実している。でも今、幸せだと言えない。中途半端で平和な日常は、時々息苦しい。とにかくこの熱さからどこかに逃れたい。

ふと、なにか違和感のあるものが目の端に映った。新築砂糖菓子ビルと隣の古いビルの間に、頑丈そうな鉄製の黒紅の扉がある。こんなところに何故扉がと思いながら近づいてみる。熱で焼けてしまった扉からの輻射熱が肌に刺さる。何かのお店屋さんだろうかと思っていたら、その扉に小さな白い字で「ふうりんや」と書かれているのを見つけた。風鈴なら一つ買ってもいい。冷房の下風鈴の音を聞きながら本を読むのはなかなか風流かもしれない。私は扉に歩み寄ると、焼けた鉄製のノブをつかんだ。あまりの熱さに反射的に手を放したが、風鈴が気になって仕方なく、ハンカチを取り出して握ると扉を開けた。

ちりいん

来客を知らせるように風鈴がゆれ、涼しげな音を立てた。店の中に熱い空気が入らないように素早く扉を閉めると、がしゃんという音とともに、熱気どころか音すらも入ってこなくなった。

店の中は暗く静かだった。壁も床も黒く塗られているために、闇の中にいるよう。裸電球が足下を照らしてくれなければ、転んでしまいそうだ。店の奥は無限に広がっているように見える。鏡のマジックだと思ってつなぎ目を見つけようと目をこらしたが、暗くてよくわからない。圧巻なのは天井だ。「ふうりんや」という名前のとおり、裸電球の光に照らされた天井いっぱい、色とりどりの風鈴がゆらゆらと揺れていた。

夏の空を映したような青があると思えば、あちらには冬の夜を思わせる群青、向こうには春の薄青。秋の蒼。

花の色を映した黄色はたんぽぽ、桜の薄紅、夏の露草。

深い淵のような緑、温かな土の色。

炎のような朱、血のような赤。黒は闇夜のような色。

そしてそれらには一つ残らず白紙が取り付けてあり、何かが書かれていた。外国の文字が多くて読めないけど、たまにひらがなと漢字も見つかる。

「えっと……」

なんて書いてあるのかなと背伸びをしたその時、風鈴がゆれて、店の奥から黒い詰め襟を着た男が出てきてうやうやしく私にお辞儀をした。ここの店主だろうか。

「いらっしゃいませ。何かおさがしですか？」

「え、ええ。まあ」

曖昧に堪えると、店主は笑ったままの顔で細い目をこちらに向けた。

「.....そうですね。あなたの頭の上、そのオリーブ色は“民族の反映”です」

作品名にしては仰々しくはないだろうか。民族だなんて。

「じゃあ、これは？」

夕暮れのような朱を指さすと、

「それは“大陸の平和”です」

男は涼しげな顔で言った。

「面白い名前ね。なにかいわく付き？」

「わたくしからお話をしても良いのですが、できれば風鈴達に聞いてください。話したくて先程からうずうずしているので」

店主はさっと手を天井に向けた。すると天井にびっしりとある風鈴が、風もないのに、ちんちらんちんちらと体を揺すった。その時、店の奥からごおっという音と共にものすごい風が吹いて、私は思わず耳を塞ぎ、目を閉じた。

気が付くと、何かが焼けた臭いと腐った臭いがまざった、とにかく嫌な匂いがした。慌てて目を開け、その光景にひいっとちいさく悲鳴を上げなくてはならなかった。それは日本史の教科書に載っていた第二次世界大戦当時の日本のようすによく似ていた。焼けた校舎の校庭に、無残にも積み上げられた死体。横で泣きながら手を合わせる大人達。向こうの方では焼けてしまった畑の前で呆然と立ちすくんでいる人たち。校舎の割れた窓硝子の向こうにたくさんの人影が見える。まさか幽霊？

そのとたん、ものすごい勢いで沢山の出来事が私の体をすり抜けていった。

爆風で吹き飛ぶ建物。

服に火が付き、逃げ惑う子ども。

無表情で平然と人を殺していく兵士達。

悶絶しながら死に飲み込まれていく兵士達。

「なんなの.....これ」

私と同じくらいの年の女の人に背中に突き刺さった無数のガラス。

死んでしまった仲間の指を切り取り、その死体を焼きながら泣く兵士。

力なく「おかあさん」とつぶやく包帯だらけの男の子の体からはウジ虫がわいていた。

すすだらけの女の方は「水を、この子に水を」と近くにいる人たちに物乞いをするが、背負われた小さな子は息絶えていた.....。

「いや！ もう見たくない！」

目を覆い、叫んだ。

しばらくすると、気持ちがいい風が頬を撫でた。潮の香りだ。そっと目を開けて見上げれば青

い空にまっしろな雲。水平線まで青く染められた海は磨き上げられたトルコ石のように光り、すごく美しいと思った。つま先のすぐ向こうは崖。海は白い波しぶきを上げている。よく見ると崖の下を見ると何人もの人がそこに浮かんで波と共にゆれていた。

悲鳴を上げようにも声が出ない。ここもさっきと同じ、戦争の……

そのとき私をすり抜けて大人が崖の上で立ち止まった。敬礼して「天皇陛下万歳！」と声を上げると、飛び降りた……。

横にいた、女の人が小さな男の子に言い聞かせていた。

「こわくないからね。ずっと一緒だからね」

「やめて！ まだ子どもじゃないの！ 死ななくても日本は戦争のない世界になるの！ だから、飛び降りなくてもいいのよ！ ほら、こっちに」

男の子だけでも止めようと手を伸ばしたが、私の手は男の子をすり抜けてしまった。親子は崖の先で地面を蹴り、飛び降りた。

「だめえええ！！」

叫びは届かなかった。つぎつぎに人々は海に身を投げていった。

誰もいなくなった崖の上に、ビー玉が一つ残された。さっき飛び降りた子どもが持っていたものかもしれない。涙のように透明なそれは、傷を帯びて虹色に輝いていた。そっとそれを包むように持つと、ビー玉はふんわりと光り、いつのまにか風鈴になっていた。

ほんのり空の青を映した傷だらけの風鈴。

下の紙にはたどたどしい文字で“こわくない世界”と書かれていた。

愛おしくそっと両手に包み、私はこみ上げるままに、大きな声を上げて泣いてしまった。

「ごめん、ごめんね。止められなくて、ごめんね」

「……お客様」

店主の声がした。一瞬誰の声だろうと思って、無数の風鈴を見て、ああ、と、声を上げた。戻ってきたんだ。

頬を伝う涙を指で拭おうとして、手の中にある小さくて傷だらけの風鈴に気が付いた。

「その、“こわくない世界”になさいますか？」

下の紙にはたしかにそう書いてある。私は頷いて答えた。

「はい。おいくらですか？」

すると彼はやさしく微笑んだ。

「風鈴の思い出に何か思ってくださいだったのでしょ？ そのお心を頂戴いたしましたので」

店主は小さな風鈴を箱に詰め、私に手渡してくれた。

「ここの風鈴達は、戦争で亡くなった方の無念が移ったガラスで出来ているんです。誰が作られたのかわからないのですが、わたくしはその風鈴達を店に飾って、来てくださるお客様にお分けしているのです」

天井を見上げると沢山の風鈴。いろんな言葉で、平和を祈る言葉が綴られている。

“争いのない世界”。

“みんながなかよしの世界”。

“幸せな世界”。

突然その中の一つの風鈴が輝き始めた。

たんぽぽ色の風鈴だ。ほのかな光を放ち、それはやがて消えてしまった。店主は光を見送るように見上げ、微笑んだ。

「願いが叶って、よかった」

「願い、ですか？」

「ええ。風鈴達は願いが叶うと、その願いと共に昇天するんです。あの風鈴の願いは、“地雷のない村”でした」

きっと、地雷除去が進んで村が平和になったのね……。

私は手の中にある“こわくない世界”をそっと手で包み、頬を寄せた。きっとこの子の願いもすぐに叶うわ。

だって、日本は私が退屈で死にそうになるくらい平和なんだもの。

私は“こわくない世界”を手を、外に出た。

熱気と女の子達の声が砂糖菓子に壁に木霊する。風は清かに街路樹を揺らし、あの崖から見た青空よりも少し濁った空を仰ぎ見る。さっき風鈴達が見せてくれた光景とは全く別で、同じ国にいることを不思議に思いながら、箱からそっと小さな風鈴を取り出した。

「ほら、これが今の日本よ。平和になったの。もう、こわくないでしょう？」

風鈴は、ちりんと、嬉しそうに体を震わせ……、

そのまま黙った。